※発言をそのまま書き起こしたデータを基に、個人情報に関する部分を削除し、文意が通るように修正を行っています。

【プロジェクトの成果報告】

１．プロジェクトの目的・手法・枠組み

木村　浩（パブリック・アウトリーチ／研究代表者）

（司会）　それでは、プロジェクトの成果報告を行います。

はじめに、NPO 法人パブリック・アウトリーチ、研究統括、木村浩より、「プロジェクトの目的・手法・枠組み」についてお話し申し上げます。

（木村）　それでは、1 つ目の題目、「プロジェクトの目的・手法・枠組み」についてご説明したいと思います。

このプロジェクトの名称は、「『原子力ムラ』の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行」になります。この題目からも、「原子力ムラ」がひとつのキーワードになっていることがお分かりいただけると思います。

2

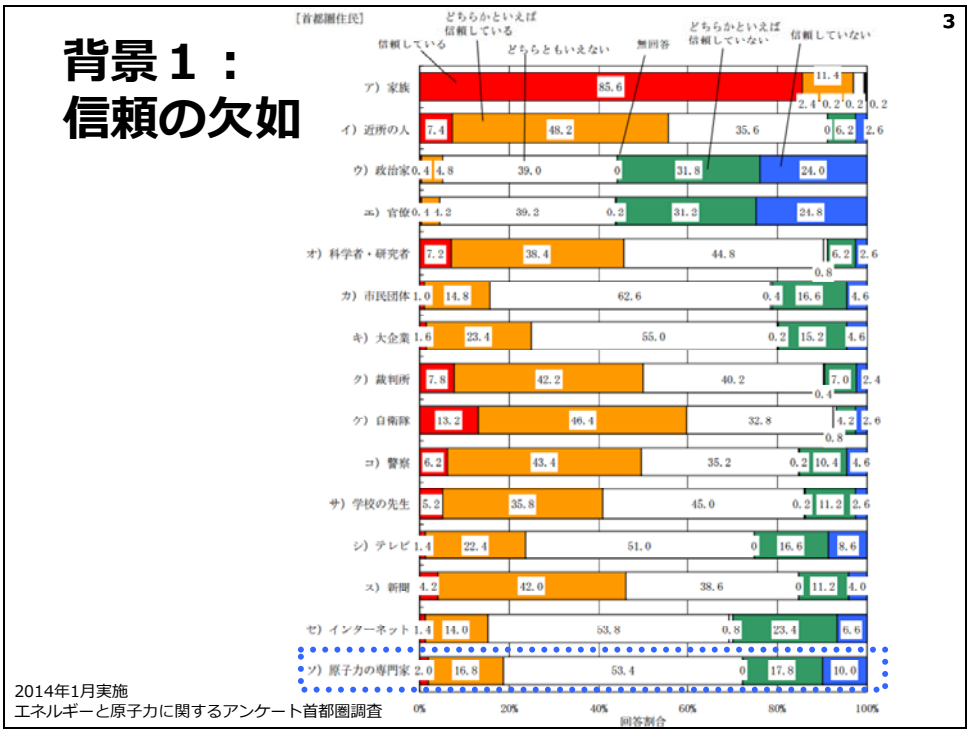
中心的な話題は何か？

- 福島第一原子力発電所の事故後、「原子力ムラ」という言葉が、たびたび聞かれるようになった。
  - 現に社会から「原子力ムラ」と呼ばれているのは事実である
- なぜ世間から「ムラ」と認識されるのか？
  - 「ムラ」を形作るのは、ムラ内部の凝集力ばかりではないのではないか？
  - すなわち、「ムラ内部」と「世間（Public, 集合としての市民）」との相互作用によって、その2者の間に境界が生じた（境界をお互いが作り上げた）状態と考えられる。
- ここで問題とするのは、「原子力ムラ」そのものというよりは、**「原子力ムラ」の境界**。

2011 年の 3 月に、福島第一原子力発電所で事故が発生しました。その後、報道などを通して、様々な場面で「原子力ムラ」という言葉がたびたび聞かれるようになりました。なぜ世間から「原子力ムラ」と呼ばれるような認識がなされるのだろうか、という疑問が、この研究のきっかけになります。

そんな中、我々は、「ムラ」を形作るものには、ムラの中の組織の問題、風土の問題も当然あるけれども、それだけではなくて、ムラの中と外との間に何らかの相互作用があって、その間に垣根ができたような状況にあるのではないか。内部でムラが形成されていく、だけではなくて、外からムラと見なされていくという方向もあるのではないか、という仮説を立てました。

この仮説に基づいて、今回のプロジェクトは、「原子力ムラ」ではなくて、その垣根、「原子力ムラの境界」に焦点を絞りました。ですから、「『原子力ムラの境界』を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行」というタイトルになっています。

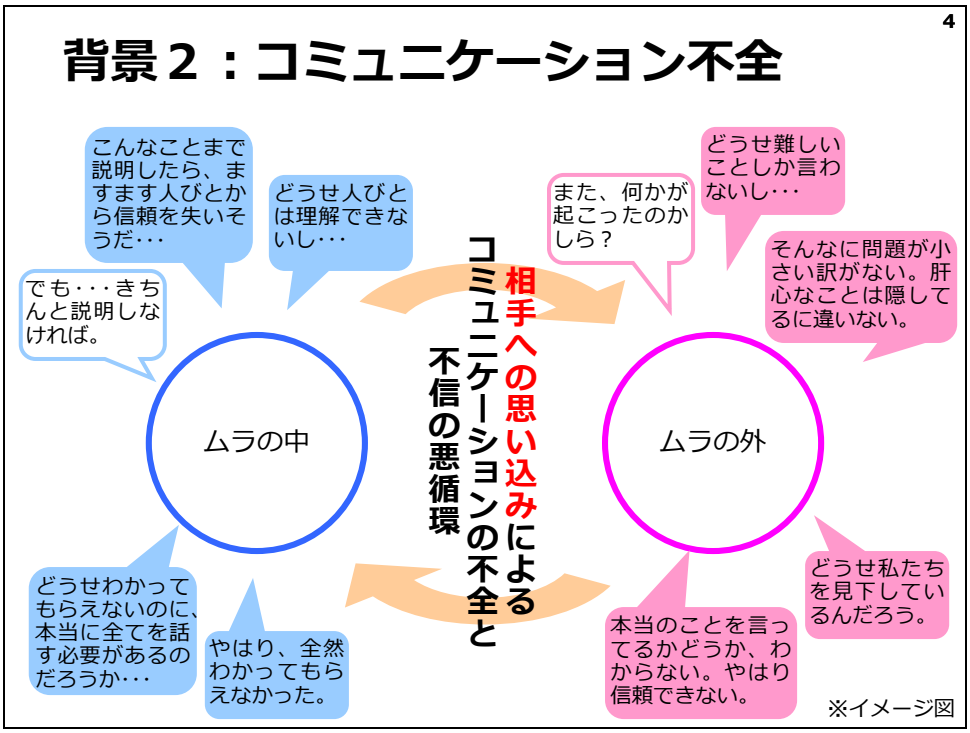


さて、このような境界、垣根は、どのように、どういう背景でできるのかということを検討していったわけですけれども、ひとつは、原子力業界全体に対しての信頼の欠如があるということが分かりました。

こちらのスライドは、今年の１月に実施した、「エネルギーと原子力に関するアンケート」の結果の一部になります。首都圏の方 500 名を対象としたアンケートなのですけれども、この質問は、ここに挙げてある対象を信頼していますか、信頼していませんか、という単純な質問です。暖色系（赤、オレンジ）が「信頼している」、寒色系（緑、青）が「信頼していない」という回答になります。

これを見ると、「政治家」「官僚」がほとんど信頼されていないということが分かります。その下に「科学者・研究者」がありますが、「科学者・研究者」はある程度人々から信頼されています。ところが、一番下に「原子力の専門家」という項目が別途ありますが、「科学者・研究者」と比較すると、信頼の程度が非常に低い。

2014 年の調査ですので、事故から３年経ってもこれだけの差があり、原子力業界そのものが信頼を失っているということが分かります。「原子力の専門家」ですらこうであって、「原子力業界」そのものはもっと信頼がないという結果も、他の研究で明らかになっています。こういった不信が、境界を作るひとつの原因になっているのではないか、と考えました。



また、ムラの中と外とのコミュニケーション不全も、境界を作る原因のひとつではないか、と考えました。

こちらの図は、あくまでイメージ図ですが、ムラの中と外という簡単な 2 項対立で示した場合の模式図です。

実際にムラの中の人にインタビューなどで話を聞くと、「きちんと説明しなければいけない」とは思いつつも、どこまで話したらいいのだろうか、こんなことまで話したら、不安になってしまうのではないか、信頼を失いそうだ、どうせ人々は理解できないのではないか、という思いもある。それでも情報を提供する、とおっしゃいます。

今度は、情報を受ける人たちの話を聞いてみました。ムラの中の人から情報を得ると、「また何か起こったのかな？」と思うのですけれども、どうせ難しいことしか言わない、そんなに問題が小さいわけがないだろう、どうせ私たちを見下したような情報提供なのだろう、本当のことを言っているかどうか分からない、やはり信頼できない、という意見が多く聞かれます。

こういったムラの外の人たちの意見がムラの中に態度としてフィードバックされていくと、やはり全然分かってもらえなかった、どうせ分かってもらえないのに、全てを話す必要があるのだろうか、でも話さなければ、ということで、非常にネガティブな形になっていってしまう。

これは単純化したイメージですけれども、このようなコミュニケーションの悪循環があるようだ、と我々は考えたわけです。

ここでポイントとなるのは、「相手への思い込み」です。この図の中で、白抜きの吹き出

しは事実に近いのですけれども、青く塗りつぶした吹き出し、赤く塗りつぶした吹き出しは、明確に根拠があるわけではなく、単純に相手を「こういうものだろう」と想像して、相手への思い込みのイメージから、自分たちの行動にセーブをかけています。

以上から、「相手への思い込みによるコミュニケーションの不全と不信の悪循環」があるのではないか、という仮説を立てました。

本研究は、以上のような仮説を基に、原子力ムラの境界を越えるための方法を示すことが最大の目的となっています。

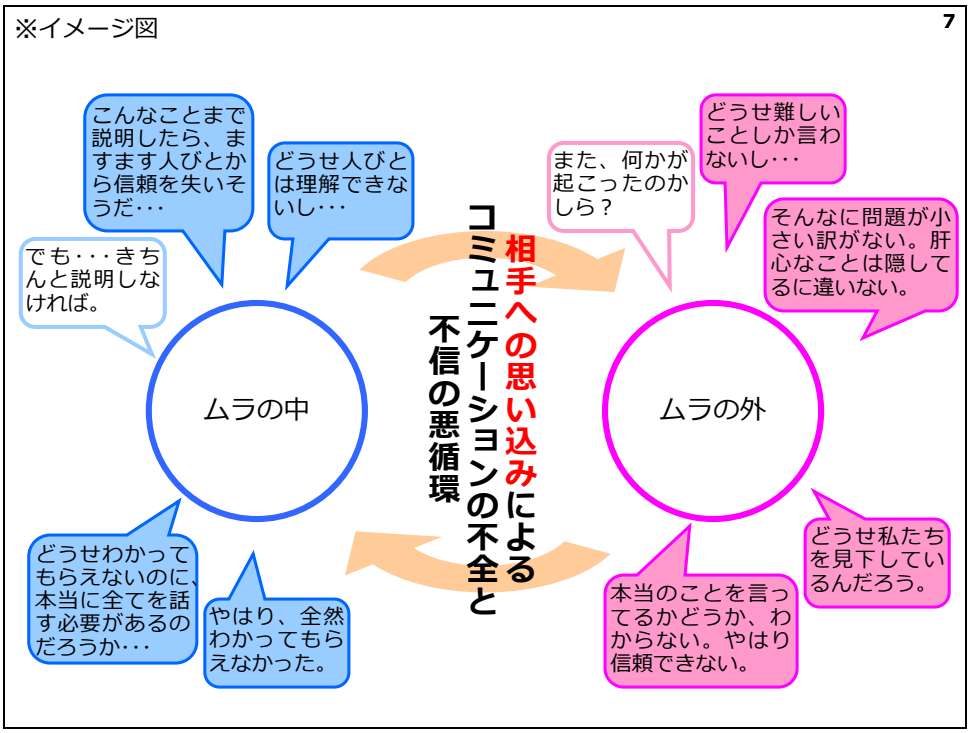
そのためには、「思い込み」を越えていくことが大切なのではないか。では、この「思い込み」を越えるためにどうしたらいいのか。

思い込みが強まっていく要因には、様々なものがあります。

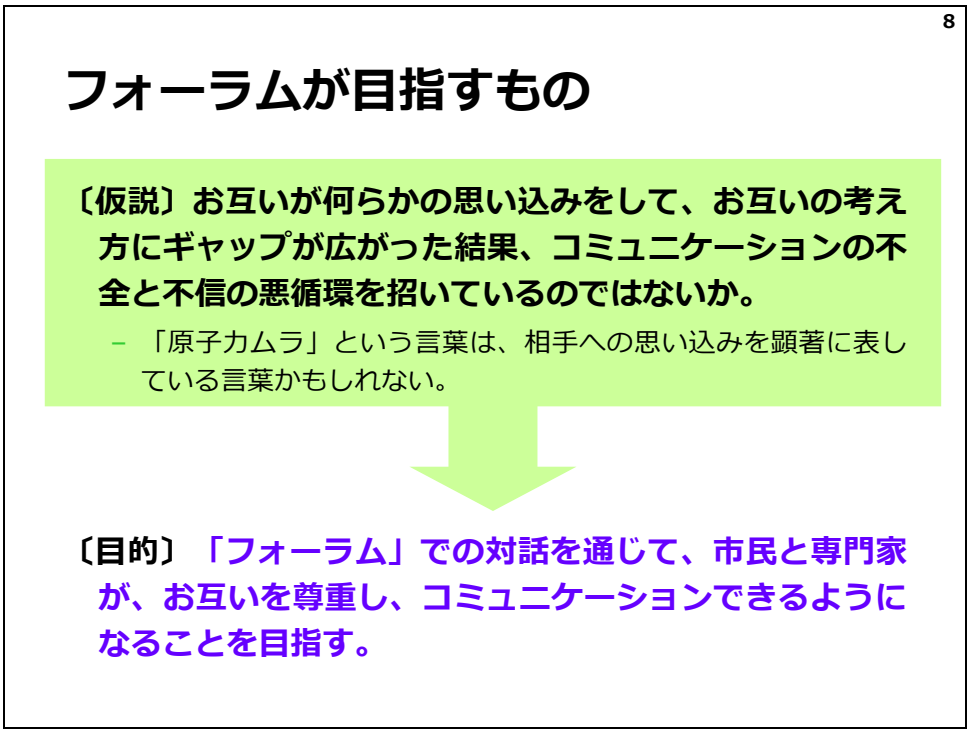
例えば、「確証バイアス」と言われるような、人間の癖のようなものがあります。人間は、一般的に、ある行動について仮説を立てて動くものである。そして、その仮説を証明するような事柄を探していって、仮説を確信していく。自分の仮説が間違っていたという反証の事実が出たときに、その事実を無視しがちである、というような癖もある。そして、自分の仮説に合うような事柄が全てだと思い込んで、仮説を確信していく。

例えば、「この人はこういう人だ」というイメージも持っていると、相手がそのイメージに合致するような行動をしたときに、「ああ、やはり」と思い、それが全てのように思い込んで、お互いにイメージを作りあげていく。例えば、こんな傾向があると言われています。

では、どうしたらいいのか。例えば、人間にはそういう思い込みがあるということを知っておく、という方法もあるのですが、我々は、お互いのイメージが、必ずしも全て（全員）に当てはまるわけではない、ということをお互いに知ることが、お互いの垣根を減らしていくきっかけになりうるのではないか、と考えました。



例えば、太い枠がついている吹き出しについて、「確かにこういう人たちもいるけれども、全ての人がこういうふうに思っているわけではない」ということを認識していくことによって、お互いの間で、少しずつ、ああ、こういう人もいるのだなということを認識しながら、お互いを尊重していくような枠組みが作れないだろうか。そんな思いでこの研究を作りあげていきました。



「フォーラム」の具体的に目的については、こちらのスライドにまとめています。

お互いが何らかの思い込みをして、お互いの考え方にギャップが広がってしまった結果、コミュニケーションの不全と不信の悪循環を招いているのではないか。「原子力ムラ」という言葉は、その思い込みを顕著に表した、ひとつの象徴としての言葉なのではないか、と考えました。

なので、原子力ムラの境界を越えるために、我々が提案している「フォーラム」という取り組みでは、フォーラムでの対話を通じて、市民と専門家がお互いを尊重し、コミュニケーションできるようになる土台を作っていく、ということになります。

9

フォーラムの概要

〔実施日程等〕
- 5回のフォーラムを1つのシリーズとして、同じ参加者で実施する。
- フォーラムは隔週の土曜日に行われる。

〔参加者〕
- フォーラム参加者は、市民10名程度・専門家10名程度である。
- フォーラム参加者は、2つの調査をベースに決められる。
  - 市民参加者：東京首都圏住民
  - 専門家参加者：原子力学会員

〔内容〕
- フォーラムでは、参加者は原子力に関するトピックについて話し合う。テーマはできるだけ参加者の意向を反映する。
- 話し合いのスタイルは、6名程度のグループワークで、オープンエンドの話し合いをする。

それでは、フォーラムの概要について、簡単にご紹介しておきたいと思います。

参加者は、「市民」10 名程度、「専門家」10 名程度としました。市民は、具体的には、東京首都圏在住の方から選出しました。専門家は、原子力学会員の中から選出しました。

ただ、20 名が集まって、1 回話し合っただけで垣根を越えることができるかというと、そういうことはない。今までのコミュニケーションの研究を見ていくと、継続的にコミュニケーションを続けていくことが非常に重要であると言われています。ですので、我々は、5 回のフォーラムを 1 つのシリーズとして、同じ 20 名程度の参加者で実施する、という枠組みを設計しています。具体的には、隔週の土曜日、2 週間に一度、同じメンバーが集まって話し合うという形になります。

また、参加者をどうやって選択するのかというと、基本的には、その母集団となる 2 つの調査を実施します。先ほどお示ししたような首都圏住民を対象とした調査と、原子力学会員を対象とした調査を先行して実施し、母集団の意見分布に合うような人たちを 10 名選択する、という形で参加者を決めています。10 名ということで、人数が少ないですので、必ずしも母集団にしっかり合わせられるわけではないのですけれども、意見がどちらかに偏っているということがないように、このような方法で参加者を決定しているということになります。

次に内容です。フォーラムでは、市民と専門家が話し合うことになりますが、話し合う内容は、原則としては原子力に関するトピックになります。ただ、テーマはできるだけ参加者の意向を反映するということで、2 年間で第 1 期、第 2 期と 2 シリーズのフォーラムを行っているのですけれども、第 1 期では皆さんの意向を聞くように、そして第 2 期では皆

さんにテーマを決めていただくというところまで徹底して、参加者の意向を反映するような形でテーマを決めています。

また、フォーラムの目的は、お互いのギャップを小さくして、垣根を低くすることですので、何か結論を出すというものではなくて、オープンエンドの話し合いとしました。また、お互い近い位置で話し合ったほうが垣根は低くなるだろうということで、6名程度のグループワーク（市民3名程度、専門家3名程度）という形式を採用しています。

10

	第1期	第2期
第1回	2013年5月25日（土）13:00～17:00 「原子カムラ」とはなんだろうか？	2014年5月31日（土）13:00～17:00 「原子カムラ」とはなんだろうか？
第2回	2013年6月8日（土）13:00～16:30 なぜ、原子カムラはなんとなく良いイメージを持たれないのか？そのイメージを払拭するには、どうしたら良いだろうか？	2014年6月14日（土）13:00～16:30 市民と専門家が考える壁の違いとは？
第3回	2013年6月22日（土）13:00～16:30 原子力に関心を持つためにはどうしたらよいか？　無関心は本当にダメなのか？　原子力への関心」とはそもそも何なのか？	2014年6月28日（土）13:00～16:30 壁を越えるために何をどう伝えるべきなのか？市民がわかりやすい原子力情報とは？
第4回	2013年7月6日（土）13:00～16:30 原子力は本当に安全か？　原子力は本当に必要か？原子力はやめることができるのか？　エネルギーの中の原子力の位置づけは？	2014年7月12日（土）13:00～16:30 原発は本当に必要なものなのか？　原子力発電所なしで電力は「本当に」足りるのか？
第5回	2013年7月20日（土）13:00～16:30 もう一度考えよう・・・「原子カムラ」はあるのか、ないのか、何なのか？「原子カムラ」というものをどうしたらよいか？	2014年7月26日（土）13:00～16:30 地球温暖化と私たちの暮らしの関わりとは？

- お互いに理解していくには、同じメンバーによる繰り返し対話が大切
- 隔週土曜日午後に、5回を1セットとして設計

こちらは、フォーラムの日時とテーマの一覧になります。

原子力に近い話題から始めて、その境界領域に入るような話題も話し合った、ということになります。

しかし、最初から原子力そのもののようなテーマを設定してしまうと、どうしても専門家が一方的に市民に教える、という形になってしまいます。それを避けるために、初回は「『原子力ムラ』とはなんだろうか？」という漠然としたテーマで話し合ってもらうことにしました。そうしたことにも気をつけて、テーマを決めていったということです。

11

運営者

- NPO法人パブリック・アウトリーチ
  - 研究立案・実施、フォーラム運営責任者
  - 木村　浩・神崎典子・諸葛宗男・久保　稔・丸山剛史・竹中一真・大石みち子・円満字千代佳・川田万里子
- NPO法人持続可能な社会をつくる元気ネット
  - フォーラム進行・対話支援担当
  - 崎田裕子・鬼沢良子・足立夏子・中岡悦子・植木恭子・渋谷友子・釜山恵利子
- 調査分析者
  - 関西大学　土田昭司・若狭湾エネルギー研究センター　篠田佳彦・兵庫県立大学　別府庸子

フォーラムの運営体制をこちらのスライドにまとめました。

研究の立案・実施、フォーラム運営の責任者は、我々NPO 法人パブリック・アウトリーチの研究グループになります。

また、フォーラムの話し合いはグループワークが中心になりますので、それを支援する立場として､NPO 法人持続可能な社会をつくる元気ネットさんにご協力をいただきました。

また、フォーラムに参加していただいた方々には、インタビュー調査とアンケート調査を実施しています。その他にも、先ほど申し上げたような母集団の調査もしています。そういった調査・分析は原子力学会にお願いして、こちらで統計的な分析、また考察等を行っていただいています。その主査が関西大学の土田先生ということになります。

こちらは、フォーラムの具体的なイメージです。

なお、フォーラムに参加した方の個人情報は非公開としていますので、こちらの写真は、フォーラム実施前に、運営者の中で予備フォーラムをしたときの様子になります。

グループワークは、具体的にはブレーンストーミングという方法を採用しました。付箋を貼りながら自分の意見を提出する。グループの中でファシリテーションもしながら、皆の意見をまとめていく。そして、グループは３つありましたので、全体で意見を発表して、皆の中で共有していく。大まかに言うと、このような流れでフォーラムを実施しました。

その中の細かい工夫については、４つ目の講演の中で改めてお話ししたいと思います。

13

プログラム例

時間	実施内容
12:30	開場・受付開始
13:00	フォーラム開始
13:00～13:25	▶ **イントロダクション** ・開会挨拶、振り返りを兼ねて自己紹介 ・前回までの振り返り（木村）
13:25～15:00	▶ **グループワーク１**：原発は本当に必要なものなのか？ 原子力発電所なしで電力は「本当に」足りるのか？ ・2グループにわかれて、話し合います。テーマについて自由に意見を言いましょう。 ▶ **全体での意見共有** ・各グループ5分で、テーマについての話し合いを発表します。
15:00～15:15	▶ **休憩・質問づくり** ・各自で、各グループのまとめに対して、質問づくりをします。
15:15～16:00	▶ **グループワーク２**：質問への答えをつくる ・グループワークで、回答をまとめます。 ▶ **全体での意見共有** ・各グループ3分で、回答を発表します。
16:00～16:10	▶ **次回のテーマについて** ・次回のフォーラムで話し合うことを決めます。
16:10～16:30	▶ **振り返り** ・アンケート記入 ・本日のフォーラムの振り返り
16:30	フォーラム終了

フォーラムのプログラムは、例えばこのような形になります。時間帯は 13 時から 16 時半ということで、実は本日のシンポジウムと同じ時間帯になります。その中で、イントロダクションがあり、グループワークが 2 回あって、発表をし、次回のテーマを決め、今回のフォーラムを振り返る。これが典型的な構成です。

また、フォーラムの設計として、記録の作成には注意を払いました。

フォーラムの運営の公正のためにも、グループワークの全ての対話は録音して、書き起こして、個人情報、不適切発言等を消した上で、全てホームページで公開しました。ただし、個人が特定できないように注意を払っています。フォーラムの記録はパブリック・アウトリーチのホームページ（http://www.ponpo.jp/forum/forum.html）で全て見ることができるようなっていますので、興味があればご覧ください。

一方で、個人情報、録画した映像、録音した音声は非公開ということで、学術的分析のみで利用することにしました。マスメディアにも現場には入っていただかないということを徹底して実施したということになります。

このようにして、全5回のフォーラムを2シリーズ、2年間かけて実施してまいりました。

この後の 2 つの講演では、フォーラムの成果を発表してもらいます。土田先生からは数値的な側面について、竹中さんからはインタビューに基づく定性的な側面について話していただきたいと思います。最後に、私から、このフォーラムというものがどうやって社会の諸問題に展開できるのかということについて、今考えていることをお話しして、前半の

講演とさせていただければと思います。

　それでは次の講演に移りたいと思います。どうもありがとうございました。（拍手）

（司会）　どうもありがとうございました。